

<大賞 1団体>

■ 特定非営利活動法人 Japan Hair Donation & Charity (大阪)

「明日へ一歩踏み出す為のウィッグ」プロジェクト

<p>団体概要</p>	<p>抗がん剤治療の過程で髪をなくした子ども達の、毛髪を失った精神的なストレスの軽減と高額な治療費で圧迫される家計を助け、患者と家族に安心を与え、復学へのハードルを下げるため、日本国内でヘアドネーション（髪の寄付）を受付し、子ども達へウィッグ（カツラ）を提供する活動を2006年からおこない、2009年9月に法人となった。</p> <p>具体的な活動は、全国から若い女性や母娘達から髪の毛や、中古カツラの提供を受け再生処理後、フルオーダーの医療用ウィッグを製作し子ども達に提供するため、毛髪の寄付の受付や、電話による相談業務、中古カツラの再生処理、フルオーダーの医療用ウィッグ製作、チャリティーイベントの企画・運営など活動を行っている。</p>
<p>事業概要</p>	<p>本事業は、抗がん剤等の治療で頭髪を失った子ども達に、人毛のウィッグ（カツラ）を無償で提供する事業である。</p> <p>頭髪を失った子ども達は、病気と戦うだけでなく、頭髪を失ったことによるストレスや登校した際の不安からイジメや登校拒否（引きこもり）へ発展することもあり、子どもだけでなく、その家族にとっても大きな問題となっている。</p> <p>今回の事業により、全国から寄付された頭髪や中古カツラから、新たに『人毛100%のウィッグ』をつくり、子どもに無償で提供することで、髪の毛を失った子どもの外出や人と逢うことの苦痛を取り除くことができる。</p> <p>カツラ作成にあたっては、全国の美容室との提携を拡大し、専任スタッフも配置するなどして、今後発展していく要素も大きい事業である。</p>
<p>講評</p>	<p>病気により頭髪を失った子どもに、「人の髪の毛」を寄付にて提供を受け、「無償」でその髪を使ったカツラ（ウィッグ）を提供するという、二つを行う団体は世界的にも珍しいとのこと。</p> <p>難病により頭髪を失った子どもを支援する本事業のこれからの展開に寄せる期待は大きく、今回の受賞をきっかけに、医療関係者、支援者・支援団体だけでなく、活動が今後より一層広がっていくことを期待する。</p> <p>本事業の広がりが、難病とたたかっている子どもに勇気を与える支援活動となって欲しい。</p>

<優秀賞 2団体>

- 特定非営利活動法人 スローソサエティ協会（兵庫）
「ずぼらDE子育て」

<p>団体概要</p>	<p>2003年6月、姫路市にて「スロービジネス研究会」を開催し、子どもへの環境教育、スローライフ、グリーンエネルギー他多様なテーマで研究会を開催していたが、経済成長だけでない多様な豊かさを追求し、その豊かさが将来世代に渡って持続する地域づくりをめざし、2005年スローソサエティ協会の設立となった。</p> <p>具体的な事業としては、子どもたちに環境学習活動やスローライフ、グリーンエネルギーをテーマとして「ひめまま☆サロン」を託児所付きで開始、「スローライフ講座」として食のイベントを開始、「はらっぱエコパーク」事業「自家製くらぶ」などの事業を展開している。</p>
<p>事業概要</p>	<p>本事業は、働くお母さんが増えている今、子育てに時間をかけられないお母さんに「ずぼら」な知恵を提案し、お母さんの子育てを支援し応援するプログラムである。手抜きではない「ずぼら」プログラムを知ること、働くお母さんが子どもと関わる時間や、精神的な余裕が生まれ、お母さんのストレスを軽減させるだけでなく、お母さん同士のネットワークや情報交換が生まれ、良い循環を創り出すことができる。</p> <p>具体的には、①「茶話会や料理教室を通じて「ずぼら」の知恵を情報交換しあい、コンテスト形式で披露する機会をつくる（「ずぼワン・グランプリ」）、②プロの料理人に要領のいい「ずぼら」術を学ぶ、③プログラムをまとめ企業の社員研修に提供するなど、働くお母さんを応援するだけでなく、社会と接点を持ち、多様な人とのつながりを生むことで親子それぞれが成長できる事業を目指している。</p>
<p>講評</p>	<p>本事業は、「ずぼら」に焦点をあてている点が面白く、創意工夫・独自性がある。子育ての時間が限られているお母さんが、子育てにまつわる「ずぼら」な知恵を、お母さん同士で出し合い、プロの料理人からも要領のよい「ずぼら」術を提供してもらうなど、お母さん同士のネットワークや情報交換が生まれ、働くお母さんの精神的な余裕とストレスの軽減を目指している。</p> <p>企画する「ずぼワン・グランプリ」の開催はネーミングもおもしろく、だれもがもつ「ずぼら」な知恵をまとめ、企業内研修プログラムとしての普及も目指しており、これらの点が、高く評価できるポイントとなった。</p> <p>今後の継続・発展性について、この「ずぼらプログラム」を食育版・家事版・あそび版・アウトドア版へと発展させていくなど次につながる仕組みや、地域のネットワーク化へと広がる仕掛けになることを期待したい。</p>

■ 特定非営利活動法人 チャイルド・ケモ・ハウス（大阪）

「小児がん専門施設におけるボランティアプログラム」

<p>団体概要</p>	<p>「がんになっても笑顔で育つ！」をスローガンに、小児がんの患者児童やその家族の生活の質の向上に配慮し、ハウスとクリニックを併設した、日本で初めての小児がん専門の施設「(通称) 夢の病院」建設に向けた活動を行うため、2006年設立した。</p> <p>具体的には、啓発活動として患者児童やその家族の生活の質の向上についてのシンポジウムや啓発イベント・広報による情報発信活動や、研究活動として闘病中の心身の状態をサポートする専門的な人材に対するトレーニング活動を実施。また「夢の病院をつくろう PROJECT」の募金活動に取り組んでいる。</p>
<p>事業概要</p>	<p>本事業は、2012年着工・2013年オープン予定の「(通称) 夢の病院」(小児がんの子どもと家族が家のような環境で治療を受けることができる病院)で、施設だけでなく、患者児童と家族をソフト面でもサポートしていくため、ボランティアを育成するプログラムを作成することをめざしている。</p> <p>具体的には、患者児童と家族に現在不足しているサービスなどの課題を整理し、患者児童の年代別サポートや家族の生活サポートに必要なスタッフ(ボランティアコーディネーターやマネージャー)およびボランティアの人数と活動内容を具体化する中で、研修内容、活動内容をプログラム化する事業としている。</p>
<p>講評</p>	<p>小児がんのため長期入院中の子どもと家族の「生活」は、子どもだけでなく、家族にも肉体的・精神的・経済的にも大きな負担となっている。そこで小児がんの子ども達とその家族が自宅のような環境で治療を受けることができる病院の建設を目指した当法人の活動であるが、今その病院のオープンが2013年に予定されている。</p> <p>今回、そのオープン予定の病院において、長期入院となる子どもと家族の「生活」のサポートを目的として、それを担うボランティア育成のための研修内容をプログラム化する本事業は、大変意味のある事業であり、本事業の助成を契機にして、作成されたボランティアプログラムの実施から、より多くの治療中の生活現場でボランティアを受け入れやすくなることにつながり、さらに、広く地域や病院などの施設・NPOなどへのプログラム提供へと波及・発展することを大いに期待したい。</p>